



第23回日本肝臓学会大会(JDDW 2019)

滝川 一

帝京大学医療技術学部長／帝京大学医学部名誉教授

2019年11月21日(木)、22日(金)に、JDDWに参加して第23回日本肝臓学会大会を神戸で開催いたしました。この学会は本来、東京医科大学茨城医療センターの故松崎靖司先生が開催される予定でしたが、2018年12月9日に急逝され、私が代行を務めました。私自身JDDWは、2015年開催の第57回日本消化器病学会大会に引き続き2回目の会長を務めることになりました。また肝臓学会としては、2013年開催の第49回日本肝臓学会総会会長以来でした。私が会長代行に就任した時点で、学会のプログラムはすべて決まっていたので、後は準備委員長の池上正先生はじめ、東京医科大学茨城医療センターの方々にお任せして準備を進めました。

学会初日の開会式(写真1)でJDDWが始まりました。最終的に2019年のJDDW参加者数は22,444名と、2016年

のAPDW同時開催の22,616名に迫る、単独開催としては過去最高となりました。

松崎先生が付けた学会のメインテーマは「ポストHCV時代の肝臓病学の展開 ～原点を考えよう肝臓病学～」でした。実は私自身、同様のテーマを2013年の総会の時に付けたかったのですが、6年前では過激すぎるので、断念したいきさつがありました。

会長講演は松崎先生が「我がライフワーク 胆汁酸：原石を磨く、細く長く」を講演される予定でしたが、竹原徹郎理事長ほかの勧めもあり、私とその代わりに追悼講演を行いました。タイトルは「胆汁酸研究と共に歩んだ松崎靖司先生」とし、私と松崎先生のこれまでの関わりや、東京医科大学茨城医療センター消化器内科の研究データを中心に、胆汁酸研究の現状と将来の展望につい



写真1 5名のJDDW参加学会会長と下瀬川徹理事長



写真2 追悼講演